1 いったい自己を認知するのは
——自己の内のどれか一つで、その他を観照して、この意味において自己を認知すると言わうるためには——
多様なものでなければならない
つまり、完全に単一であるものとは、自己のほうへ向き直って自己を覚知することができないというわけであろうか
5 それとも、複合物であるゆえに、自己のうちにあってその他を直知すると言うだけであり、自己を直知するのだと言われるものは
——それはたとえば、感覚によってわれわれが自分の姿や、肉体のその他の性状を把握するようなものであるが——
というのは、複合物であるがゆえに、自己のうちにあってその他を直知すると言うだけであり、自己を直知するのだと言われるものは
——それは、感覚によってわれわれが自分の姿や、肉体のその他の性状を把握するようなものであるが——
モニタープログラムは、自己をモニタすることはない。なぜなら、自身が持つプロセスコードは、他を観察し、比較すること、という効果を持つからである
本当の意味で自己を直知することはできないであろうから
9 なぜなら、そのようにして把握されたものの内には、全体が認識されていないであろうから
10 自分とともにあるその他の諸部分を認識するまさにその部分が、自分自身をも直知したのではないからである
11 またそこで得られるのは、求められていたものの、つまり<自己が自己を(知る)>ことであるだろうから
12 だから、単一なものも自己を覚知するのだと定めねばならない
そして、このことがどのようにして(行なわれう)るかを、できれば考察すべきである
さもなければ、何ものかは真に自己が自己を直注するという二の男解を故意すべきである
15 しかし、この見解を放棄することは、多くの不条理がわれわれに伴うので、全く不可能である
18 英知はその他のものの認識をもっているのに、自己の認識と知識を所有しないのだとすればである
19 というのは、たとえわれわれが確にはこのことを全く不条理なこととみなして認めないとしても、しかし英知という本性に対してすらこれを認めないことは、絶対に不条理であろう
20 というのは、一方、外部にあるものは、英知ではなく感覚が、なおまた書がおおぼかなくディアノイア(理性)とドクサ(臆見)が、それらを把握する
21 なお、英知がそれらを把握するのであるとすれば、自己自身を把握するであろう
22 そのようなことは、自己自身へ向かうものであるのであるから
23 他方しかし、直知されうる限りのものは、もしろん英知がそれらを認識するであろう
24 さてそこで、いったい英知はそれらのみを、それともそれらを認識するであろう自己自身をも認識するのだろうか
25 また、英知が自己を認識するのであるとすれば、自分自身が自己を認識するであろうことだけで、自分がその神何者であるのかは認識しないのだろうか
26 そして、自分に属するものが認識されていることは認識するだろうが、自分自身が何者であって認識するのかは、認識しないのだろうか
27 さて、自己の内容が認識されていることは認識するだろうが、自分自身が何者であって認識するのかは、認識しないのだろうか
28 いやそれとも、英知は自分に属するものの自分自身をも認識するのだろうか
また、その様態はどのようなものであるのかを、その程度のものなのかをも、考察しなければならない
2 しかし、その前に魂について、これに自己認識を認めるべきかどうか、またこれの内で認識するものは何であり、どのようにして認識するのかを調べてみなければならない
さて、まず魂の感覚する(能力)は、外部のもののみを対象とするのだ、とわれわれは即座に断言するだろう
5 というのは、たとえ魂が肉体内部で起きていることを知覚するとしても、このはいってものの把握はそれ自身の外部のものを対象としているのだから
6 なぜなら、肉体の内の情態をそれがそれ自身によって、感覚するだけなのだから
9 次に、魂の内で推理するものは、感覚から即えられた表象内容を用いて判定をしたり、結合したり、分解したりする
10 あるいはまた、それは、英知から別来するものについても、いわばそれらの<印象>を観照して、これらの印象について同じ機能を行使するのである
13 そしてこれを、魂の行なう想起であるとわれわれは言うことができるであろう
15 さて<魂の英知>の能力はここまで終わるのか、それともさらにこの英知、自己のほうを振り返って自己を認識するのだろうか
16 いったいは、もしわれわれがじこ認識をこの部分に認めるならば
17 そのうえ、魂は、自己自身を理解可能なかぎり命題から離れる
18 あたしわれわれがそれを認めないのであれば、議論の外みを先へ進めて、かの英知にまで行かねばならないだろう
19 しかし、いったいこれらの行為は、魂の中のものであるのか、それとも、肉体のものであるのか、まず調べなければならない
20 そして、そこでの魂の理性的部分は、果たしてこれ自身自分のはうを振り向くのだろうか
21 だが、もしわれわれが、ここのこの下方の英知において認めるのであれば、(上方の英知と下方の英知)自己直知にどのような差異があるのかをわれわれは考察すべきだろう
23 なぜなら、どのような差異もないのであれば、すでにわれがアクラシス(純粋難儀の英知)であるだろうから
24 いや、そうでなくて、それは両方向から受け取った印象の理解に連するだけなのである
自己自身を理解可能かという命題から離れる
25 では、どのようにして理解に連するのか、まず調べなければならない
3 さて感覚は、ひとりの人間を見るとき、その印象を理性に伝える
では後者(理性)は何と言うだろうか
いや、まだ何も言わないだろう
ただし、もしかしたら、理性は自分を相手にこう討論するかもしれない
認めて、じっとしているだけである
「これはだめだったな」と
——もしこの人間には前に会ったことがあれば
そして、記憶を援用しながら、「これはソクラテスだ」と言うだろう
5 また、それがさらに姿を縦横広げて吟味するのあれは、表象が与えたものを細分しているだけである
6 しかしそれがこの人間は本人かどうかを言うばあいには、感覚を通して知った事柄に基づいてそう言ったのだが、それらの事柄の上に立ってそれが言ったことそのものは、これはもはや自分から得て持っているものであろう
理性は善の基準を自分のもとに持っているのだから
9 どうしてそれが善を自分のもとに持っているのだろうか
自己のもつ基準との比較の結果が自己理解であるとすれば、基準とのものに価値を与えることが理解とはならないであろう
10 それは、理性が善に類するものであるからだ
それで、このようなものの知覚に関して、理性は力を授けられているのだ
英知が理性を照らしているのだから
というのも、これこそ魂の純粋な部分であって、英知の直観をその上に受けているのだから
15 それは、魂は推理できるものでなければならないからだ
13 しかし、まさにこれこそが英知であり、感覚する(部分)から始まるその他が魂であり、と考えてはなぜいけないのか
そして、これらはさて推理する能力の仕事なのだ
17 しかし、なぜわれわれはこの部分(理性)に直観を認めて、おしまいにしないのか
20 しかしもしだれかが、「この部分がもう一つ別の能力によって自分に属するものを考察するのだと考えてはどうしていけないのか」と問うならば、その人が次のいうことは、もはや理性的なものでも推理するものでもなく、純粋な英知を彼は取り上げているのである
しかし、それはなぜ<魂の(部分)>と言わねばならないのだろうか
否、それをわれわれは魂の(英知)とは言わないで、われわれの英知と言うだろう
わわわれはそれを他意いの諸部分の内に数えはしないけれども
だからこそ、わわわれはそれを援用することを、援用しないことあるのだ
理性をいつも(用いるけれども)
30 では、その<援用する>とはどういうことなのだ
32 いやむしろ、彼にしたがって(われわれが語るの)だ
33 つまり、最初に(英知の指示を)受けたある推理的部分によってという仕方で、われわれは英知にしたがっているわけだ
34 では、われわれが思考するばあいもそうなのか
35 いや、推論するのはまさにわれわれ自身である
36 というのも、これこそがわわれらなのだから
そして、英知の働きの産物は上方からやってくる
37 そして<わわわれは、魂のこの主要部分である
40 しかしーー方、推論は常にわれわれの(魂の)だと承認されているように思えるが
他方、英知については異論が生じている
44 そして、其れが分離されたものであるのは、これは神に似たものつまり英知を通じて、神に似たものの、つまり英知の(はっきりとした)ありかを観めながら、かの者(英知)のほうへ傾くのだからである
4 だがわれわれも、また、かの者にしたがっている時には、王者である
一つは、われわれの内部に一種の決定として書き込まれた、いわば文字のようなものに則って、という意味であるが、他は、われわれが単にいわば漂流されているという意味、あるいは視前しているのであるわれわれが観て知覚することができる、という意味である
9 ということは、自己を認識する者に二通りあるということと、——つは、魂の理性の本性を認識する者であり、他は、この者よりも上位のものである
ただし、<の>者にしたがって——ということには二通りある
5 そして、われわれが自己を認識するのは、このような観物(つまり英知)の力を借りて、その他のものを学ぶことによってであり、さもなければ、このようなものを認識する力(英知の力)にしたがってまさにこのかたのものによって学ぶことであり、あるいはさらに、われわれ自身がかのもの(英知)となることによってである
10 つまり自己に英知となることによって、英知によって自己を認識する者である
13 というのは、この部分だけが、直注することへの属性を示すことのできるからであり、まさしんがこれに対して、「私とこれ」と言うならば
11 そして、このことによって自己を認識するということは、まさに自分が判断する事柄を自分が判断するのだということ、また、その判断は、英知から得て自己のに所属しているだろうということを
15 では理性的部分は、いったい知らないのか
自分が理性的部分であること、また自分が外部のものの観察するということ、また自分が判断する事柄を自分が判断するのだということ、また、その判断は、英知から得て自己のに所属しているだろうということを
20 しかし、いったい理性は、それがどのようなものであり、それの行なう仕事はどのようなものを知っているのに、其れ考えるのであるのか知らない
21 とすると理性は、「自分は英知から出たものであり、英知の次の第二の位置をとおめ、英知の似姿であり、全てのものを いわば書き込まれた文字として自分の内にもっており、他方、書いている者、あるいはすでに書いた者は、かの所にいるのだとは語るとしても、この程度にまで伴っきするのだろうか
24 そしてわれわれは、別の能力を援用して、英知からそのものを知ろうとするのであれば、そのように考えるほかはないのだ
26 それとも、かの者もわれわれのものであり、われわれもかの者に属するのであるからには、われわれはかの者を分有することによって、英知をも自己自身をも認識するのだろうか
28 そうだ、もし果たしてわれわれが、英知において自己が自己を(認識する)ということが、いったい何であるかを知ろうとするのであれば、そのように考えるほかはないのだ
30 かくして、だれか威名人が自己に属する他の一切を放棄して、これによってこれ(英知)を観める時、すなわち、自己によって自己を観める時に、その人は彼自身が英知となっているのである
だから、このほど あい彼は、英知として自己自身を見るわけである
5 では、英知は自己の威名部分を自己の他の部分を洞見するのだろうか
しかしそうであれば、威名部分は見るものだが、別の部分は見られるものであるだろう
4 ではどうか、もし、英知全体がいわばイ<ホモイオメス(均質的なもの)>であるとすれば、見る部分が見られる部分とかしもちがわないであれば
そしてこれは、<自己が自己を(見ること)>ではない
5 なぜなら、このようであれば、英知は自己と同じである自己あの(見られる)部分を見て、自己を見ることになるだろうから
7 いや、まず第一に、自己の分割ということがおかしいのだ
6 なぜなら、見るものが見られるものと少しもちがわないのだから
8 というのも、むろん、模然に(分割するのではあるまいから
また、分割する者はどちらなのか
9 観照する側へ自己を置く者か、それとも観照される側となる者か
7 いや、まず第一に、自己の分割ということがおかしいのだ
いったい英知は、どのようにして分割するのだろうか
8 というのも、むろん、模然に(分割するのではあるまいから
9 観照する側へ自己を置く者か、それとも観照される側となる者か
10 それにまた、観照者は観照する側に自己を置いているのだから、観照されるものの内に自己を認識することがこうしてできようか
あるいはこのような仕方で自己を認識する者は、観照する者としての自己をではなく、せいぜい観照されるものとして の自己を認知するのだろうか
13 なぜなら、それが見た対象は、観照していると言ってはなく、観照されていると言ってはなく、観照されていると言ってはなく、観照されてい